

令和 8 年木造建築士試験

問 題 集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

1. この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
2. この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
3. この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
4. 問題は、全て五肢択一式です。
5. 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
6. 解答に当たっての留意事項は、下記の(1)及び(2)のとおりです。
 - (1)適用すべき法令については、令和8年1月1日現在において施行されているものとします。
 - (2)地方公共団体の条例については、考慮しないものとします。
7. この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます。
(中途退出者については、持ち帰りを禁止します。)

学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 積載荷重は、人間や移動がそれほど困難でない家具・調度・物品等の荷重をいう。
2. 住宅の居室における床の積載荷重は、一般に、「地震力を計算する場合」より「大梁・柱又は基礎の構造計算をする場合」のほうが大きい。
3. 多雪区域における地震時の短期に生ずる力は、固定荷重、積載荷重、積雪荷重及び地震力によって生ずる力の総和である。
4. 積雪荷重は、一般に、積雪量 1 cm ごとに 1 m²につき 20 N 以上の単位荷重に、屋根の水平投影面積及びその地方における垂直積雪量を乗じて計算する。
5. 瓦葺屋根の固定荷重の値は、葺土の有無によって変化しない。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風による水平力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地震力及び風による水平力は、建築物に対して、短期に生ずる力として考える。
2. 地震時の建築物の揺れは、一般に、地上部分より地下部分のほうが大きい。
3. 地震力の計算に用いる設計用一次固有周期(単位 秒)は、一般に、建築物の高さ(単位 メートル)に係数 0.03 を乗じて求める。
4. 風圧力は、建築物の形状、高さ及び建設地域を考慮して求める。
5. 地震力に対する検討は、一般に、張り間方向と桁行方向について行う。

〔No. 3〕 木造建築物における部材の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 鼻隠 ——— 屋根
2. 格縁こう ——— 天井
3. 方立 ——— 開口部
4. 長押 ——— 床
5. 敷目板 ——— 壁

〔No. 4〕 木造2階建ての建築物における基礎又は地盤に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。ただし、基礎については構造計算を行わないものとする。

1. 地盤の長期許容応力度が 20 kN/m^2 であったので、べた基礎の底盤の厚さを 100 mm とした。
2. 塩害のおそれのある地域であったので、基礎の鉄筋に対するコンクリートのかぶり厚さを大きくした。
3. 地盤の凍結のおそれのない地域であったので、べた基礎の根入れ深さを 180 mm とした。
4. 地盤の長期許容応力度を設定するために、計画された建築物の中央及び四隅付近の5箇所において、地盤調査を行った。
5. 切土及び盛土を行った造成地盤において、建築物は盛土側に設置した擁壁からできるだけ離して計画した。

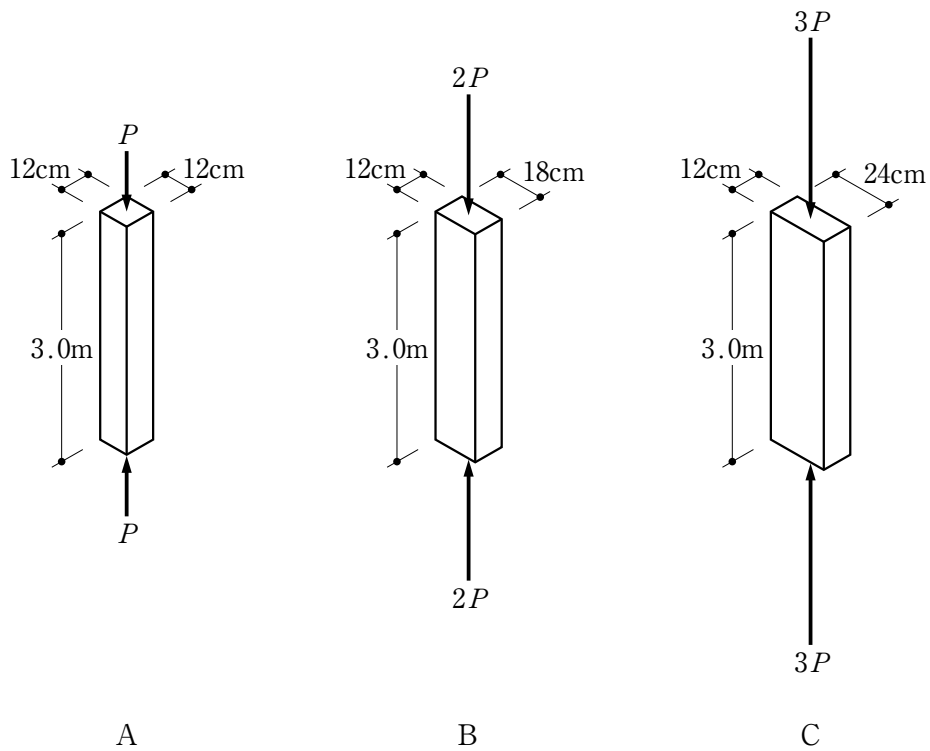
〔No. 5〕 木造軸組工法による2階建ての建築物における土台又はアンカーボルトに関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 建築物に地震力及び風による水平力が作用すると、土台には曲げ応力が生じる場合がある。
2. 同じ大きさの鉛直荷重が作用する柱の土台へのめり込み量は、一般に、土台の材端部より材中間部のほうが大きくなる。
3. アンカーボルトのねじ部は、損傷、錆^{さび}の発生、汚損を防止するために、布、ビニルテープ等を用いて養生を行う。
4. アンカーボルト(M12)のコンクリートへの埋込み長さは、 250 mm 以上とする。
5. アンカーボルトに用いる角座金の寸法は、土台へのめり込みを考慮して決定する。

〔No. 6〕 木造軸組工法による2階建ての建築物における柱又は横架材に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 管柱は、構造耐力上主要な部材である。
2. 針葉樹は堅木と呼ばれ、一般に、広葉樹よりも強度が高いため、柱・梁等に用いられる。
3. 横架材のスパン表は、あらかじめ所要の構造計算等を行い作成された、断面寸法を求めるための早見表である。
4. 柱の断面寸法は、横架材間の垂直距離に基づき所定の方法により決定するか、若しくは構造計算によって決定する。
5. 床梁の中央部付近の下端に、耐力上支障のある欠込みをしてはならない。

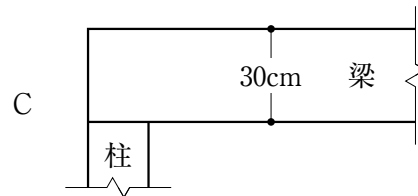
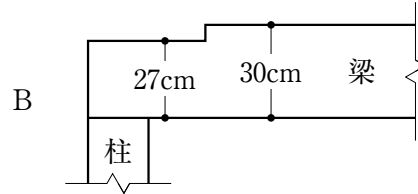
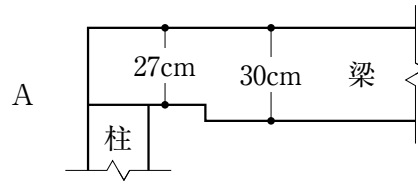
〔No. 7〕 図のような両端から荷重を受ける木造の柱A、B及びCの座屈のしにくさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての柱の材質、支持条件は同一とし、荷重は断面の図心にかかるものとする。



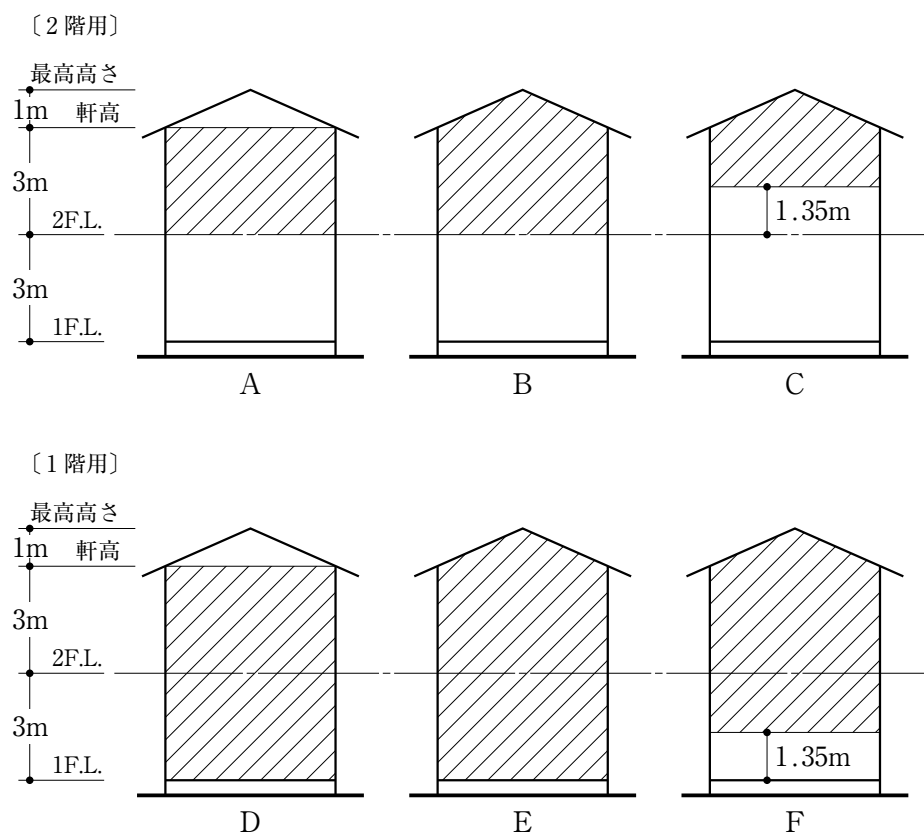
1. $A > B = C$
2. $A > B > C$
3. $B = C > A$
4. $C > B > A$
5. $C > A > B$

〔No. 8〕 図のような木造の梁A、B及びCの端部におけるせん断強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての梁の材質及び幅は同じものとする。

1. $A = B > C$
2. $B > A > C$
3. $B > C > A$
4. $C = A > B$
5. $C > B > A$



〔No. 9〕 図のような立面をもつ木造建築物において、1階及び2階に必要な軸組(耐力壁)の長さを計算する場合の見付面積(斜線部分)の組合せとして、正しいものは、次のうちどれか。

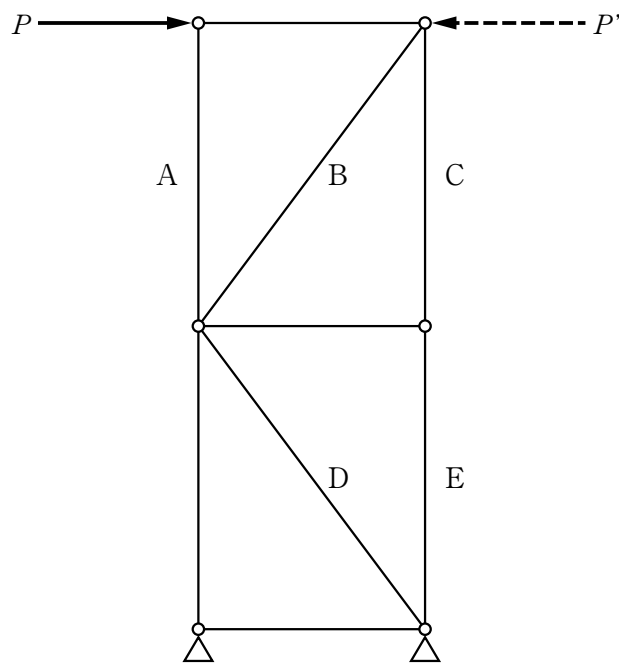


	2階用	1階用
1.	A	D
2.	B	E
3.	B	F
4.	C	E
5.	C	F

〔No. 10〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 大壁仕様の耐力壁において、構造用合板(910 mm×1,820 mm)を縦張りする場合、その継目部分には、断面 45 mm×100 mm以上の胴つなぎを設けて釘打ち接合する。
2. 断面寸法が 4.5 cm×9 cmの木材の筋かいの端部を、筋かい金物(BP-2 と同等の耐力が認められた金物)を用いて、軸組に緊結する。
3. 同じ構面内の筋かいは、傾きが右上がりのものと左上がりのものとが、対になるように配置する。
4. 片面に大壁仕様で構造用面材を釘打ち張りし、他の面に真壁仕様で構造用面材を釘打ち張りした耐力壁の倍率は、5 倍を限度として、それぞれの倍率を合計した値とすることができる。
5. 耐力壁は、平面的な剛性分布のバランスの指標である偏心率ができるだけ小さくなるように配置する。

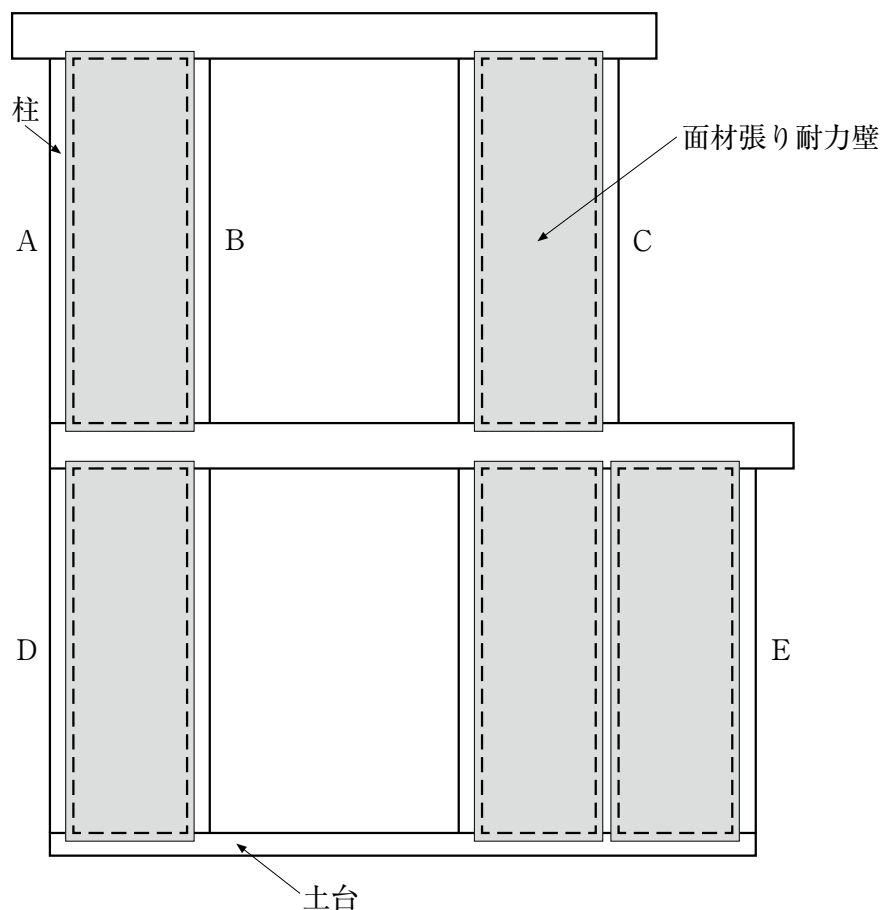
〔No. 11〕 図のような軸組に、水平力 P 又は水平力 P' のどちらか一方が作用する場合、部材A～Eに生じる軸力についての次の記述のうち、誤っているものはどれか。



1. 部材Aには、水平力 P によって、引張力が生じる。
2. 部材Bには、水平力 P' によって、圧縮力が生じる。
3. 部材Cには、水平力 P' によって、引張力が生じる。
4. 部材Dには、水平力 P によって、圧縮力が生じる。
5. 部材Eには、水平力 P によって、圧縮力が生じる。

〔No. 12〕 図のような2階建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱A～Eの脚部に生じる引抜き力が最も大きいものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。また、耐力壁は面材張り(■部分)で、倍率は2.5とする。

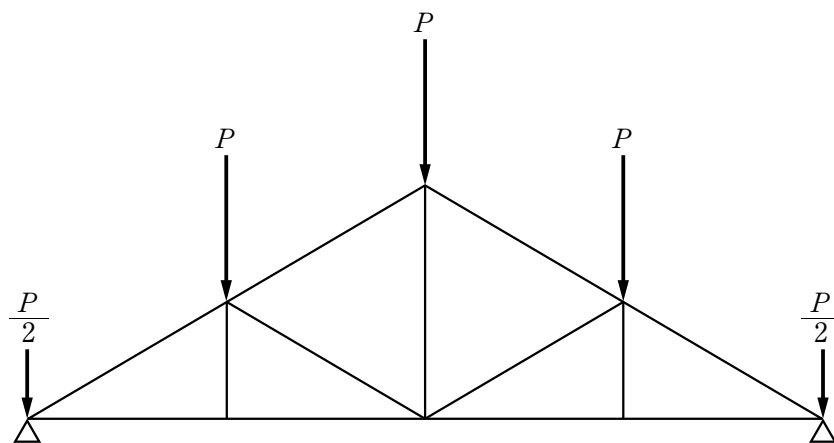
1. A
2. B
3. C
4. D
5. E



〔No. 13〕 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 京呂組は、軒桁に小屋梁をかける方式であり、柱の位置にかかわらず小屋梁を配置することができるので、住宅などに広く用いられている。
2. さす組は、2本の斜材と小屋梁等で三角形の骨組を構成する小屋組である。
3. 小屋組の部材及び接合部の剛性と耐力は、建方中に生じる応力に対して十分に安全なものとする。
4. 桔木^{はね}は、軒の出を深くするために、てこの原理を使って鼻母屋^{もや}・茅負^{かやおい}を先端で支える部材である。
5. 配付け垂木は、切妻屋根において、棟木の側面へ斜めに取り付ける部材である。

〔No. 14〕 図のような荷重が作用する洋小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。



1. 屋根勾配にかかわらず、支点に作用する力は変わらない。
2. 屋根勾配にかかわらず、真束に作用する力は変わらない。
3. 屋根勾配が大きくなると、合掌に作用する力は小さくなる。
4. 屋根勾配が小さくなると、^{ろく}陸梁に作用する力は小さくなる。
5. 屋根勾配が小さくなると、方づえに作用する力は大きくなる。

〔No. 15〕 木造軸組工法による建築物の2階床組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 火打梁を用いた床の水平剛性を確保するために、床梁の^{せい}を 240 mm とし、床面積に対する火打梁 1 本当たりの負担面積が 2.5 m²以下となるようにした。
2. 下地板に用いる厚さ 15 mm の構造用合板は、床梁、根太等の横架材に、N50 釘を用いて所定の間隔で固定した。
3. 床梁の間隔が 1.82 m であったので、根太床とし、断面寸法 45 mm × 60 mm の根太を間隔 455 mm に配置した。
4. 床梁については、その両端部を受ける横架材との仕口に、羽子板ボルトを用いた。
5. 床の水平剛性を確保するために、根太の間隔を 303 mm として床梁及び胴差に落とし込み、曲げ性能の等級が 2 級の構造用パネルを所定の方法により留め付けた。

〔No. 16〕 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 耐力壁線に設ける2つの開口部の幅をそれぞれ3mとしたので、その幅の合計が当該耐力壁線の長さの $\frac{3}{4}$ 以下であることを確認した。
2. 耐力壁に設ける幅1.8mの開口部の上部にはまぐさを設け、たて枠と同じ寸法型式のまぐさ受けで支えた。
3. せっこうボード張り耐力壁について、せっこうボードを枠材に留め付けるのに、CN50釘を用いた。
4. 耐力壁に使用する下枠及びたて枠として、日本農林規格に規定されている寸法型式204の枠組壁工法構造用製材を用いた。
5. 耐力壁の上部には、耐力壁の上枠と同じ寸法型式の頭つなぎを設け、耐力壁相互を構造耐力上有効に緊結した。

〔No. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 軸組に方づえを設けて水平力に抵抗させることとしたので、柱が先行破壊しないことを確認した。
2. 用途が物置の小屋裏の床面積が、その小屋裏が存する階の床面積の $\frac{1}{4}$ であったので、壁量計算用の床面積を算定するに当たり、その小屋裏の面積を考慮した。
3. 2階に吹抜けを有する建築物において、2階の壁量計算用の床面積を算定するに当たり、床面積に吹抜け部分の面積を加算した。
4. 敷地が軟弱な地盤であったので、建築物に配置する耐力壁の量を減らした。
5. 横架材の上端の相互間の垂直距離が3.5m、柱間の距離が910mmであったので、断面寸法が3cm×9cmの木材の筋かいを入れた軸組の倍率を、1.5よりも小さい値とした。

〔No. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、**最も効果の低いものは、次のうちどれか。**

1. 耐力壁を構成する1階柱の柱脚と土台とを、金物により緊結した。
2. 屋根葺材を、日本瓦から金属板に葺き替えた。
3. 鉄筋コンクリート造のべた基礎を有する1階の床組において、床下地材を小幅板から構造用合板に張り替えた。
4. 2階の耐力壁の直下に柱がないので、当該柱を受ける梁を補強し、その曲げ剛性を高くした。
5. 土塗り壁の外壁を、構造用合板による大壁に変更した。

〔No. 19〕 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、**最も不適当なものは、次のうちどれか。**

1. 1階床荷重(束立て床・べた基礎)
床板 → 根太 → 大引 → 鋼製床束 → 基礎スラブ
2. 2階床荷重(梁床)
床板 → 根太 → 床梁 → 胴差 → 柱
3. 2階天井荷重
天井板 → 吊木^{つり} → 吊木受^{つり} → 野縁 → 野縁受 → 小屋梁
4. 屋根荷重(和小屋折置組)
野地板 → 垂木 → 母屋^{もや} → 小屋束 → 小屋梁 → 柱
5. 屋根荷重(洋小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋^{もや} → 合掌 → 陸梁^{ろく} → 敷桁 → 柱

〔No. 20〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、**最も不適当なものはどれか。**

1. 「製材の日本農林規格」における乙種構造材は、主として高い曲げ性能を必要とする部分に使用する目視等級区分構造用製材である。
2. 木材の熱伝導率は、普通コンクリートの熱伝導率に比べて小さい。
3. 断面が大きい集成材の炭化速度は、1分間に0.6mm程度である。
4. 荷重を分散して負担する目的で根太を並列して設けた場合、その根太の基準強度を割り増しすることができる。
5. クリープによる木材の曲げ変形の増加量は、一般に、乾燥材より未乾燥材のほうが大きい。

〔No. 21〕 木材の強度等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 材面に占める節の割合が大きい製材の圧縮強度は、節の割合が小さい製材の圧縮強度よりも小さい。
2. 枠組壁工法構造用製材の曲げ強度は、一般に、梁せいが大きいほど大きくなる。
3. 一般に、木材の含水率が概ね 30 % 以下の場合、含水率が高いほど強度は小さくなる。
4. 木材の長期に生ずる力に対する許容応力度は、短期に生ずる力に対する許容応力度の 0.55 倍である。
5. 木材のめり込みとせん断に対する基準強度は、樹種によってそれぞれ規定されている。

〔No. 22〕 木造建築物の防腐・防蟻等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 外壁をモルタル塗り仕上げとする場合の軸組の腐朽防止には、外壁通気構法が有効である。
2. 接合金物の腐食による強度低下を防止するためには、溶融亜鉛めっき等の防錆^{せい}処理を施した金物を使用する。
3. 木材腐朽菌は、水分がなくても十分に繁殖する。
4. イエシロアリは、乾燥した木材であっても食するので、建築物の小屋組のような上部の構造物にも被害が及ぶことがある。
5. 加圧式防腐処理木材を現場で切断加工した場合、切断面については再度防腐処理を行う必要がある。

〔No. 23〕 木質材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 「構造用パネルの日本農林規格」における構造用パネルは、切削機械により切削された単板の繊維方向を互いにほぼ平行にして積層[・]接着したものである。
2. 「集成材の日本農林規格」における接着の程度の表示が「使用環境 A」である集成材は、直接外気にさらされる環境で 사용할 ことができる。
3. 「合板の日本農林規格」における化粧ばり構造用合板は、構造用合板の表面又は裏面に、木材質特有の美観を表すことを主な目的とした単板をはり合わせたものである。
4. 「直交集成板の日本農林規格」における直交集成板は、挽板^{ひき}等をその繊維方向を互いにほぼ平行にして幅方向に並べたものを、主としてその繊維方向を互いにほぼ直角にして、3 層以上積層接着したものである。
5. MDF(ミディアムデンシティファイバーボード)は、主に木材等の植物繊維を成形した繊維板である。

〔No. 24〕 鉄筋コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. コンクリートの乾燥収縮は、一般に、水セメント比の大きなコンクリートほど小さくなる。
2. コンクリートの引張強度・せん断強度・付着強度は、圧縮強度から推定できる。
3. AE剤などの混和剤は、ワーカビリティの向上など、コンクリートの品質を改善する目的で使用する。
4. 高強度コンクリートとは、設計基準強度が 48 N/mm^2 を超えるコンクリートをいう。
5. コンクリートは、アルカリ骨材反応を起こすと、骨材が膨張し、ひび割れが発生する。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. グラスウール断熱材は、ガラス原料及びガラスを熔融し繊維化したものを、バインダを用いて成形したものである。
2. 合成樹脂エマルションペイントの「2種」は、主に屋外や湿気が発生する箇所に用いられる。
3. 発泡プラスチック系断熱材には、あらかじめ発泡させて板状とした製品と、施工現場で発泡させて用いるものがある。
4. セラミックタイルは耐久性、防水性及び防火性に優れた建築材料であり、建築物の壁や床を保護する機能を有している。
5. ALCパネルは、軽量で耐火性及び断熱性に優れているが、吸水性が高いため、寒冷地では凍害を受けるおそれがある。

学科Ⅳ（建築施工）

〔No. 1〕 工事現場の安全確保に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 軒の高さが3 mの木造平家建て住宅の構造部材の組立て作業であったので、作業主任者を選任しなかった。
2. 単管足場における建地の間隔については、桁行方向1.8 m、はり間方向1.5 mとした。
3. 高さが2 mの作業場所であったので、墜落制止用器具を安全に取り付けるための設備を設けた。
4. 架設通路の勾配が15度を超えたので、踏棧を設けた。
5. 高さが3 mの作業場所から不要な資材を投下するに当たり、資材が飛散するおそれがあったので、投下設備を設けなかった。

〔No. 2〕 木造2階建て住宅における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 仮設工事計画書は、施工者が作成して保管した。
2. ブラケット一側足場において、建地の間隔を1.8 mとし、建地間の積載荷重の限度を150 kgとした。
3. 単管足場において、地盤面からの高さが3 mの位置に設ける作業床の幅を、30 cmとした。
4. 単管足場において、作業に伴う物体の落下防止のために、作業床の両側に高さ10 cmの幅木を設けた。
5. くさび緊結式足場において、壁つなぎの間隔を、垂直方向5 m、水平方向5.5 mとした。

〔No. 3〕 木造2階建て住宅における土工事・地業工事等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

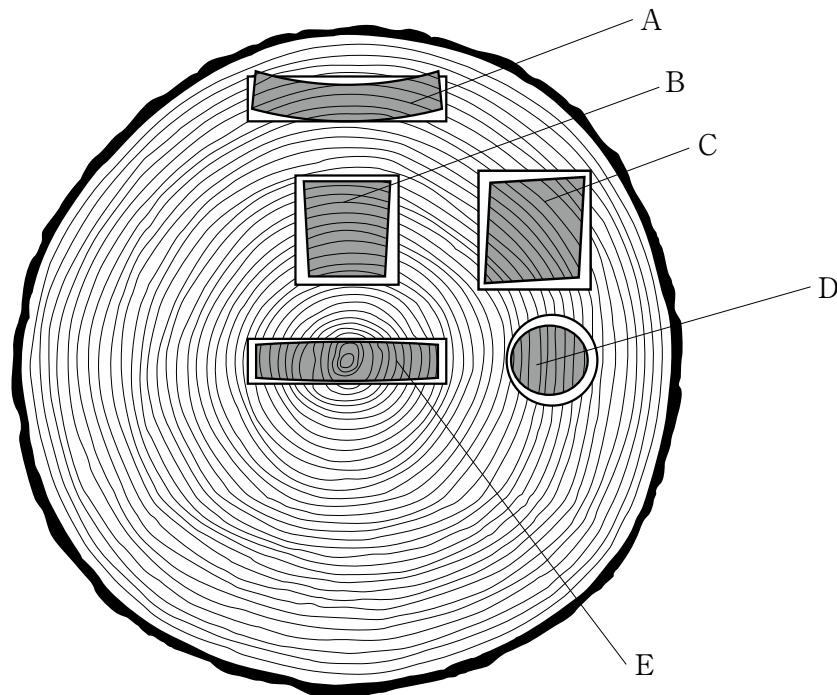
1. スクリューウエイト貫入試験により、敷地の地盤の地耐力を調査した。
2. ベンチマークは、コンクリート杭を用いて移動しないように設置し、その周囲を養生した。
3. 割栗地業の目つぶし砂利として、切込み砂利を使用した。
4. 割栗石は、一層小端立てとし、隙間のないように敷き詰めた。
5. 軟弱な地盤を補強するために、捨てコンクリートを打設した。

〔No. 4〕 木造2階建て住宅における基礎工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ねこ土台を使用し、外周部の土台の全周にわたって、1 m当たり有効面積 75 cm^2 以上の床下換気孔を設けた。
2. 基礎断熱工法としたので、床下換気孔を設けた。
3. べた基礎としたので、床下防湿措置としての防湿フィルムは、設置しなかった。
4. 軟弱地盤であったので、基礎杭を用いた。
5. コンクリート打込み終了後は、直射日光、寒気、風雨などを避けるために、シートを用いて養生した。

〔No. 5〕 図のような丸太材の断面図(針葉樹)の木取り位置A～Eにおける木材の乾燥収縮に伴う変形(網かけ部分)として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. A
2. B
3. C
4. D
5. E



〔N o. 6〕 木造住宅における木材の一般的な使い方として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 梁は、背を上にして使用した。
2. 大引は、腹を上にして使用した。
3. 鴨居は、木裏を上にして使用した。
4. 敷居は、木表を上にして使用した。
5. 室内の床仕上げに用いる縁甲板は、木裏を上にして使用した。

〔N o. 7〕 木造軸組工法における施工順序として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 階段
側桁 → 踏板 → 蹴込み板 → 手摺^{すり}
2. 小屋組
小屋梁 → 小屋束 → 母屋^{もや} → 棟木
3. 建方
軸組の建込み → 仮筋かい → 本筋かい → 建入れ直し
4. 地業
縄張り → 遣方^{やりかた} → 根切り → 砂利地業 → 捨てコンクリート打設
5. 土台
側土台 → 間仕切土台 → アンカーボルトの締付け → 火打土台

〔N o. 8〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との一般的な組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 火打土台 —— ヒノキ
2. 小屋梁 —— アカマツ
3. 大引 —— スプルー
4. 棟木 —— ベイマツ
5. 通し柱 —— スギ

〔No. 9〕 木造軸組工法における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 大壁造の面材耐力壁において、ラスシート張りの継目は、横方向の重ね代を1山重ねとし、縦方向の重ね代を30 mmとした。
2. 床勝ちとなる大壁造の面材耐力壁において、厚さ9 mmの構造用合板を用いたので、壁倍率3.7に適合させるために、厚さ30 mm×幅60 mm以上の受け材を床面にN75の釘で120 mm以下の間隔で打ち留めた。
3. 真壁造の壁倍率3.3の構造用合板を用いた耐力壁については、厚さ15 mm×幅90 mm以上の貫材に釘で打ち留めた。
4. 屋根の野地板には、JISに適合するパーティクルボードで、厚さ12 mmのものを使用した。
5. 根太を用いない2階の床組の下地板として、厚さ24 mmの構造用合板を用いた。

〔No. 10〕 木造軸組工法における仕口の名称とその一般的な使用箇所との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 蟻掛け ————— 通し柱と胴差
2. 平ほぞ差し割くさび締め ——— 土台T字部
3. 傾ぎ大入れ小根ほぞ差し ——— 柱と足固め
4. ねじ組 ————— 寄棟隅取合い
5. 渡りあご ————— 小屋梁と軒桁

〔No. 11〕 木造軸組工法において用いる金物(表示記号)とその使用箇所との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

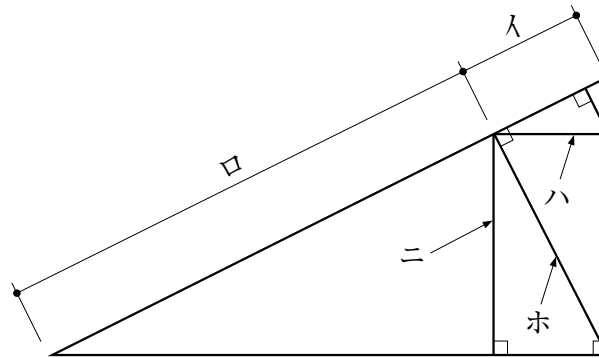
1. ひら金物(SM-15S) ————— 垂木と軒桁
2. 火打金物(HB) ————— 2階の床組の隅角部
3. かね折り金物(SA・S) ——— 通し柱と胴差
4. 羽子板パイプ(SP・E) ——— 1階の管柱と2階の管柱
5. 引張金物(TB-D) ————— 基礎と柱

〔N o. 12〕 木造軸組工法における継手の図とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	図	名 称
1.		追掛け大栓継ぎ
2.		腰掛け蟻継ぎ
3.		金輪継ぎ
4.		いすか 鴟 継ぎ
5.		台持ち継ぎ

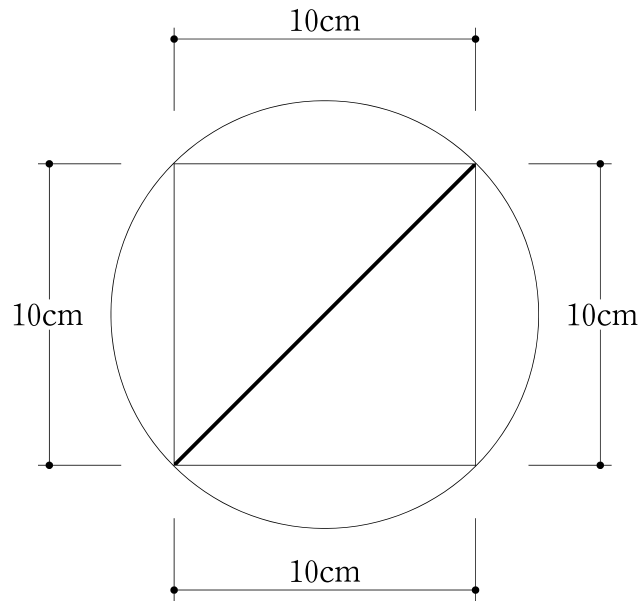
(注) N o. 12の選択肢2と選択肢4については、著作権法上の関係から、その出所等を明示しています。
図の出典：2025年版フラット35対応 木造住宅工事仕様書（住宅金融支援機構）

〔No. 13〕 規矩基準勾配図における線分イ～ホとその名称との組合せとして、誤っているものは、次のうちどれか。



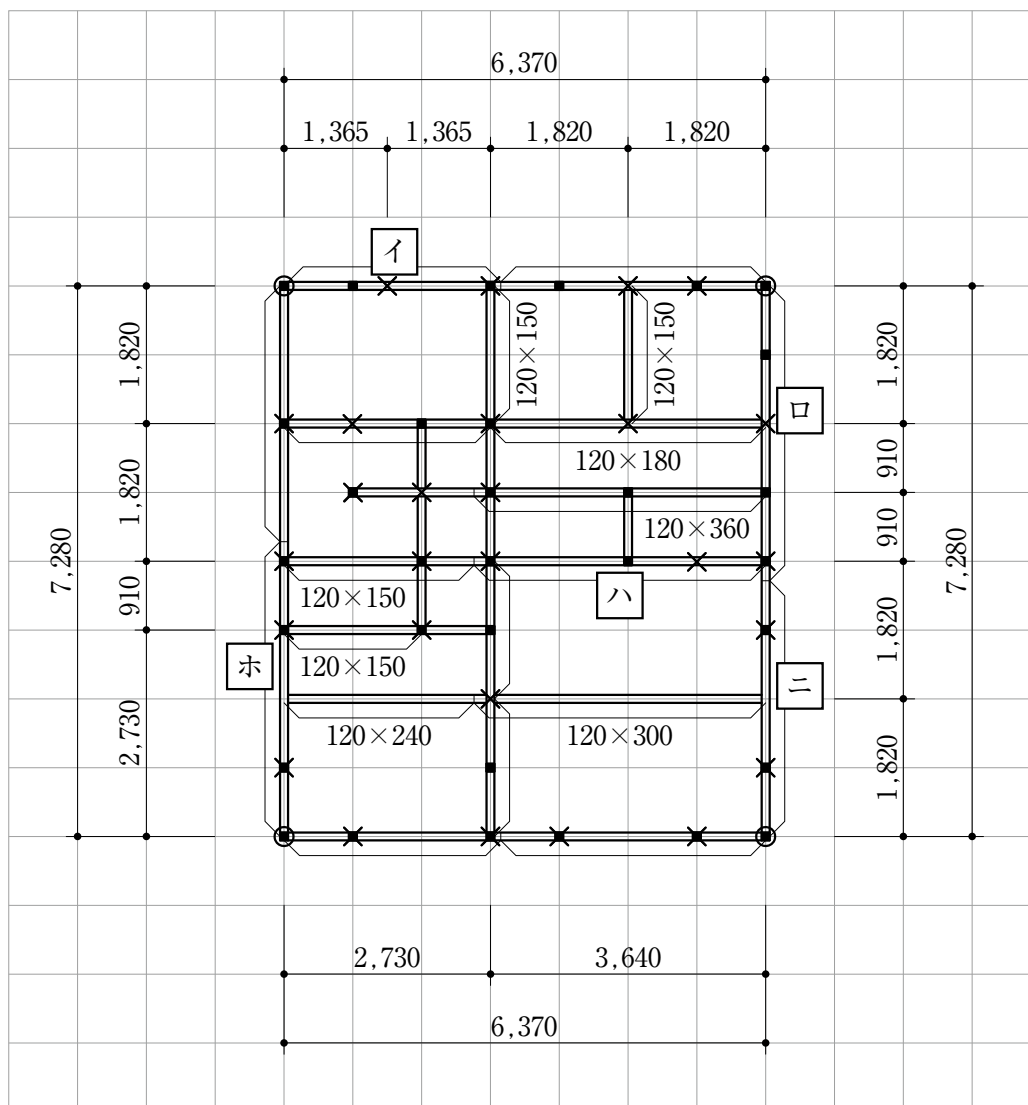
1. イ ————— 短玄
2. ロ ————— 長玄
3. ハ ————— 小中勾
4. ニ ————— 欠勾
5. ホ ————— 中勾

〔No. 14〕 規矩術におけるさしがねの目盛として、図の対角線に等しいものは、次のうちどれか。



1. 表目の 15 cm
2. 表目の 10 cm
3. 裏目の 15 cm
4. 裏目の 10 cm
5. 丸目の 10 cm

〔No. 15〕 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材イ～ホとその断面寸法（幅mm×せいmm）の組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、使用する木材は無等級材とし、添え梁（枕梁）等はないものとする。

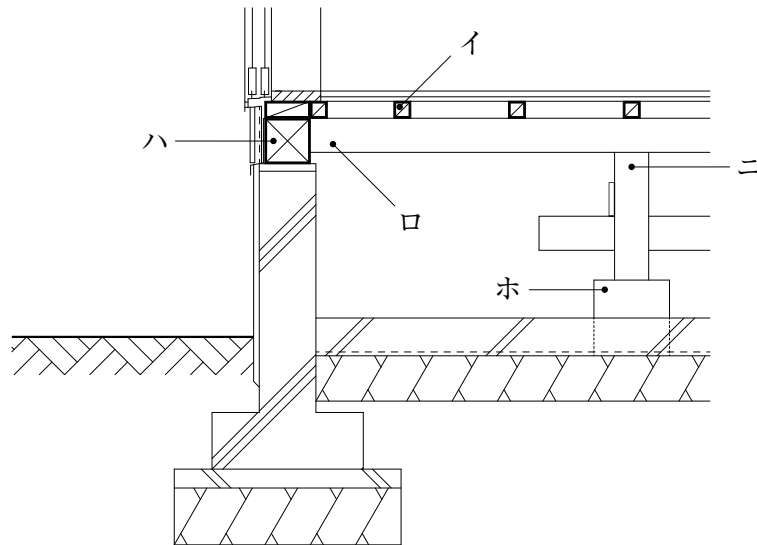


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		⊙	×	■	✕	—	—

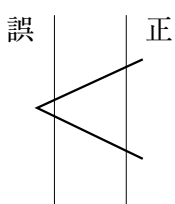
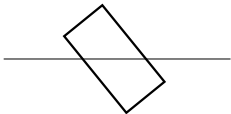
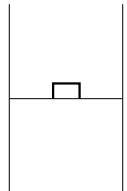
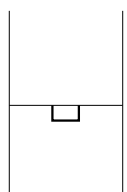
1. イ ————— 120 × 180
2. ロ ————— 120 × 180
3. ハ ————— 120 × 270
4. ニ ————— 120 × 330
5. ホ ————— 120 × 270

〔No. 16〕 図のような木造住宅の断面詳細図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



1. イ ————— 根太
2. ロ ————— 大引
3. ハ ————— 土台
4. ニ ————— 根がらみ貫
5. ホ ————— 束石

〔No. 17〕 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		峠印
2.		水印
3.		鴨居下端印
4.		敷居上端印
5.		切り墨印

〔N o. 18〕 木造住宅における防水工事及び屋根工事に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. バルコニーの排水勾配は、防水下地面で $\frac{1}{50}$ とした。
2. 金属板一文字葺において、葺板の周囲四辺の[・]は[・]ぜは一重とし、下[・]は[・]ぜを 18 mm、上[・]は[・]ぜを 15 mmとした。
3. 屋根断熱の工事において、断熱材の屋外側に通気層を設けた。
4. 庇^{ひさし}の下葺に用いるアスファルトルーフィングの壁面との取合い部において、その壁面に沿って 250 mm以上、かつ、雨押え上端より 50 mm以上立ち上げた。
5. 屋根の下葺に用いるアスファルトルーフィングにおいて、左右(長手方向)の重ね幅を 100 mmとした。

〔N o. 19〕 木造住宅における左官工事及びタイル工事に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. コンクリート下地へのセメントモルタル塗りの壁において、上塗りには、下塗りよりも貧調合のセメントモルタルを使用した。
2. ラスボード下地へのせっこうプラスター塗りの壁において、上塗りは、中塗りが十分に乾燥してから塗り付けた。
3. セメントモルタル塗りの壁において、下塗り後の放置期間は、2 週間以上とした。
4. 壁のタイルの圧着張りにおいて、一般の平壁部分は、上部から下部へ張り進めた。
5. 壁のモザイクタイル張りにおいて、表紙張りのモザイクタイルを張付けた後に、時期を見計らい、水湿しをしてから紙をはがし、タイルの配列を調整した。

〔N o. 20〕 塗装工事に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. セメントモルタルの素地に、合成樹脂調合ペイント塗りを行った。
2. マスチック塗材塗りは、多孔質のハンドローラーを用いて行った。
3. 木部の油性ステイン合成樹脂ワニス塗りは、油性ステインを塗った後、合成樹脂ワニス塗りを行った。
4. 木部のクリヤラッカー塗りは、下塗りとしてウッドシーラーを塗布し、研磨紙すり後、上塗りを行った。
5. 木部の[・]や[・]には、小刀等を用いて削り取った。

〔No. 21〕 木造住宅における建具工事及び内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木製建具の^{かまち}框と棧との仕口は、特記がなかったので、ほぞ組とし、接着剤を併用して密着させた。
2. 洗面脱衣室の床の下地板に、JASに適合する普通合板の2類を使用した。
3. フローリングを直張りするに当たり、ウレタン樹脂系の接着剤を使用した。
4. 畳の敷込みは、敷居との段違い、隙間などが生じないように行った。
5. セッコウボードを直張りするに当たり、木ねじを使用した。

〔No. 22〕 木造住宅における設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 給水横管は、下向き供給方式を採用したので、先上がりの均一な勾配で配管した。
2. 排水ますのふたは、プラスチック製のものとした。
3. 配管の施工において、管と管、管と壁などの距離の測定は、管の中心線を基準として行った。
4. 屋内の排水管における満水試験は、試験圧力を 30 kPa とし、保持時間を 30 分とした。
5. 屋内の排水横管は、管径が 65 mm であったので、勾配を $\frac{1}{50}$ とした。

〔No. 23〕 建築工事又は測量とそれに用いる機械・器具との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 木材の面取りや溝付け —— トリマ
2. 合板の釘打ち ————— エアネイラー
3. 鉄筋の結束線締め ————— バーベンダー
4. 長さの測定 ————— コンベックスルール
5. トラバース測量 ————— トータルステーション

〔N o. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 諸経費は、共通仮設費、現場管理費及び一般管理費等を合わせたものである。
2. 計画数量は、設計図書に基づいた施工計画により求めた数量をいい、仮設、土工等の数量がこれに該当する。
3. 設計数量は、設計図書に記載されている個数や設計寸法から求めた正味の数量である。
4. 複合単価は、材料費や労務費など、二種類以上の費用を合わせたものの単価である。
5. 材料としての木材の所要数量を求める場合、木材の断面寸法は挽立^{ひき}て寸法とする。

〔N o. 25〕 設計図書等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 設計図書には、一般に、施工図は含まれない。
2. 設計図書には、一般に、質問回答書が含まれる。
3. 工事請負契約書類には、一般に、現場説明書が含まれる。
4. 設計図の内容は、一般に、特記仕様書よりも優先される。
5. 住宅性能表示制度において、設計図書の評価結果をまとめたものを、設計住宅性能評価書という。

